

197 マリー=アントワネットが夢見た日本（2023 年 9 月 26 日）

以前に[ルーブル美術館の日本コレクション](#)をご紹介ときに、マリー=アントワネットの漆器コレクションについてお話しました。今回は、このコレクションをもう少し詳しくご紹介します。

ルイ 16 世の妃であったマリー=アントワネット（1755-1793）の人生と王妃が生きた時代の歴史は知られていますが、王妃の日本に対する関心について語られることはあまり多くありません。先の記事でご紹介したとおり、彼女は母マリア・テレジア女王から漆器を贈られたことがきっかけで漆器に魅了されて、彼女自身も漆器をコレクション



したと言われています。ルーブル美術館の工芸部門には、机、水指、香炉、硯箱（写真右）が展示されています。この硯箱も、先の記事に写真に掲載した机や水指と同じく、金箔をふんだんに使った贅沢な漆器です。いずれも 17 世紀前半に日本で作られた漆器と 17 世紀後半にパリの職人による金の装飾を組み合わせた豪華な作品です。これだけ金粉を多用した漆器は、



日本でも見る機会があまりありません。その上、フランスの装飾芸術が加わったこれらの作品は、フランスでしか見ることができない貴重な遺産です。

マリー=アントワネットの漆器コレクションを最も多く所蔵しているのは、ベルサイユ宮殿です。王妃のアパルトマン（写真右）の机の上には、金色の犬の入れ物（写真左下）が置かれています。この犬は、2018 年にラ・ポスト（フランス郵政公社）が発行した切手のデザインになりました。コレクションには、金色の鶏の入れ物（写真右下）もあります。マリー=アントワネットが、ベルサイユ宮殿のプライベートルームにこれらの動物の形をした漆器を飾り、自分のコレクションを眺めて楽しんでいた姿が想像できます。



パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本



セーブル陶磁美術館には、「セルビス・ジャポン」と名付けられた磁器の皿が展示されています（写真右）。これは、専門家によると、マリー=アントワネットがセーブル制作所に作らせたもので、ごくわずかな数の作品しか残されていません。ヨーロッパの王侯貴族にもてはやされた日本の伊万里焼の中でも、17世紀後半に流行し、金彩と青や赤の色絵を使った「金欄手（きんらんで）様式」の影響を受けていることが伺えます。



マリー=アントワネットが生きた時代のフランスでは、当時流行していた「シノワズリー」（日本を含めたアジアのもの）に代表され、ヨーロッパに輸入された漆器や陶磁器くらいしか、日本について知り得る情報はなかったことでしょう。マリー=アントワネットは、遠い異国の日本という国をどのように想像していたのでしょうか。

※美術館の展示は、変更される場合があります。